

# 「数理科学」は語る

30年前から現代へのメッセージ

桜井 邦朋

1982年1月号

30年前に書かせて頂いた「[28]は秘密の数か?」の中で、メドスン・ホイールにふれたのだが、その写真は、エディ(J.A. Eddy)博士から分けてもらったものであった。

この人は考古天文学(Archaeoastronomy)と呼ばれる研究分野のパイオニアの一人だが、彼を有名にしたのは、太陽活動にみられる極端な衰退期であった「マウンダー極小期」(Maunder Minimum)の発見と研究であった。1645年から1715年にかけての70年は、太陽では無黒点期、地球では気候の極端な寒冷期であった。

彼の論文は「マウンダー極小期」と題して1976年に、*Science*誌に発表されたが、その前年の11月にNASAゴダード宇宙飛行センター(GSFC)で開かれた「太陽研究の将来」と題した国際会議における招待講演で、初めて語られたのであった。出席者にとっては耳にするのが初めてのことで、まさかこんなことがと半信半疑であった。当時、このセンターで働いていた私も出席しており、講演を聴いたのだが、こんなことってあるのかというのが実感であった。

会議後、詳しく知り勉強したくなった私はエディに手紙を直接書き、後に*Science*誌に発表された論文原稿のコピーと、この方面の研究への手引きとなる手紙とを、彼からもらったのであった。本当に有難く嬉しいことであった。これがきっかけとなり、彼との付き合いが始まり、太陽活動の長期変動が地球環境に及ぼす影響や気候変動の原因について、私も勉強を始めたのであった。

エディ博士との出会いと彼からの影響については、先頃出版した『移り気な太陽—太陽活動と地球環境との関わり』(恒星社厚生閣)の「あとがき」でふれているが、彼の講演を聴くことがなかったら、この方面の研究に私が踏みこむことは多分なかった。

彼は一度我が国を訪れたが、その折に一週間余り一緒に旅行することができ、仕事他彼から受けた影響についてもふれながらいろいろと話すことができ、私に



は忘れられない思い出となっている。太陽研究に、また考古天文学に関わった研究に、さらに天文学の歴史の研究にと多方面にわたって大きな業績をあげられたエディ博士は、2009年6月10日に亡くなった。残念なことである。

この人が創始した太陽活動の過去数千年にわたる長期変動の気候に及ぼす影響についての研究成果が出発点となって、現在懸念されている地球温暖化をめぐる研究にまで、その影響が及んでいることを想起したい。

(さくらい・くにとも、神奈川大学名誉教授)